

脳梗塞の臨床と研究～Fukuoka Stroke Registry を中心に～

九州大学大学院医学研究院病態機能内科学 北園孝成

社会の高齢化に伴い脳卒中の発症は増加の一途をたどっており、脳卒中予防の対策強化や医療の充実が急務である。しかしながら、脳卒中診療の根拠となるべきエビデンスの多くは欧米諸国の研究に由来しており、わが国においても脳卒中に関する大規模な臨床研究システムの確立が必要である。我々は、共通の診断基準や治療方針のもとに福岡県の脳卒中基幹病院を対象施設とする多施設共同脳卒中データベースを構築した。Fukuoka Stroke Registry (FSR)は、同意を得られた発症7日以内の脳卒中患者の臨床情報、血漿、ゲノムの収集に加えてその後の予後調査を行う臨床疫学研究である。本研究では急性期脳卒中患者の発症登録による発症病態分析と要因解明を行うとともに治療成果の評価につながる研究を行い、本邦における脳卒中医療の基盤となるエビデンスを構築することを目的としている。FSRは、平成19年6月に登録を開始し、平成23年5月までに4,965例(対象症例の88%)を前向きデータベースに登録しており、また、後ろ向きデータベースには平成11年6月以降の対象症例6,505例の登録を完了している。追跡率は99%をこえ、平成23年6月から4年目の追跡調査も開始した。得られたデータを解析して脳梗塞の病態ならびにリスク管理に関連するいくつかの新知見を得ている。また、我々は、FSRのサブスタディとして、三菱化学株式会社ならびにモレキュエンス社との共同研究として、脳梗塞のバイオマーカー探索研究である **Research of Biomarkers for Ischemic Stroke (REBIOS)**を行っている。REBIOSでは、発症24時間以内の脳梗塞患者180名と、年齢および性をマッチングさせた久山町在住の健常者172名を対照として、発症24時間以内、3日後、7日後、14日後、3ヶ月後に採血を行い、三菱化学メディエンス社において16項目、米国RBM社 Human MAP-Antigens (Version 1.6)により90項目のタンパク質を測定するとともに、モレキュエンス社においてプロテオミクスの手法を用いて未知のタンパク質マーカーを探索している。これまでに脳梗塞診断、脳梗塞病型診断、急性期増悪予測、慢性期予後予測に有用な数種類のタンパク質を発見している。さらにこれらの結果から脳梗塞病態の解明につながる新知見も得ており、基礎研究によってそれらのタンパク質の機能を解析している。